大正時代中頃から昭和初期　薪ストーブの火入れ式　小林キクエ
『平成３年度　常呂町オホーツク大学文集　トーコロ』からの抜粋

…10月のある日、例年通り暖房の火入れ式をした。我が家の暖房は石油ストーブで、小さな皿に塩を入れて石油ストーブの上に置いて、心の中で安全を願うだけですが。

これは亡き実家の母から見習ったことの一つで、長年の習慣となり、しなければ気が済まないことです。

幼い頃、我が家の暖房は薪ストーブだった。春になって暖かくなるとストーブを取り外してストーブに墨を塗り、新品のようにきれいにして秋までしまっておく。そして、再び落ち葉の頃になると取り付けられる。夕暮れ近くまで遊んでいて家に帰ると部屋の中がボワーっと暖かく、墨の焼けた匂いが漂っていた。そして、焚き口の前には塩が一つかみ置かれていた。火の安全を祈願し清めたのでしょう。

そんな実家の母の姿を見ていたせいか、私も結婚してから今日まで続けているのです。

幼い頃、部屋のほぼ中央にストーブが置かれ、ストーブを囲んで父の座が決まり、台所に近いところが母の座だった。その間に兄がいたり姉がいたり、小さな弟は母のひざや父のあぐらの中にいた。たわいのない話題で夜長を楽しんだものです。

たくさんの思い出話がストーブの周りに残っているような気がしてならない。そんなことを思い浮かべながら、今年も我が家の火入れ式を行いました。

＊注：ここでいう「薪ストーブ」は、薄鉄板製薪ストーブのことと思われます

『ストーブ博物館』（新穂栄蔵／著）には、「薄鉄板製の薪ストーブは、明治の中期頃から相当数つくられ、販売されたと思われる。これはたいした設備・機械を必要とせず、町のブリキ職人にもつくれるもので、その工夫やアイデアも職人自身によるものや注文主の要望に応じたものが主で、したがってその種類は極めて多く、現在も使われている。…現在も多く愛用されているのにはそれなりの理由がある。すなわち、安く、軽く、小型であるということだ。特に、安いということが、その耐久性の欠点を十分補っているのである」と記述しています。

＊常呂での薪ストーブ普及は

明治40年　薪ストーブになったのは、市街でさえ明治40年、安部豊次郎が函館から取り寄せて使ったのが初めてといわれ、土佐に現れたのは早くてもそれから３～４年後（常呂町史　土佐郷土史）

明治41年　鉄板作りの薪ストーブが使用されてくる（岐阜百年記念史）

＊小林キクエさんは、平成３年度で「助教授課程１年」だったので、オホーツク大学に入学して９年目。年齢は70歳代半ばと思われます。このことと薪ストーブの普及を考慮して、子ども時代の思い出を大正時代中頃から昭和初期と推測しました。また、実家のあった本州の地域は残念ながら分かりません。